318
526

中學教科

現代修身訓

一卷

文學博士 清原貞雄著

東京 中文館 發行

K220.1
45
1

K220.1
45
1

廣島高等師範學校教授
文學博士 清原貞雄 著

中學教科

現代修身訓 卷一

東京 中文館藏版

昭和三年八月

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義

勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン [illegible]

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ [illegible]

明治二十三年十月三十日 [illegible]

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒忘相誡メ自彊息マサルヘシ

抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣副署

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕卽位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮

振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

大正十二年十一月十日

攝政名

國務各大臣副署

中學教科

現代修身訓 卷一

目次

第一章 立志……一
第二章 學問の目的……四
第三章 勉强の方法……七
第四章 愛校心……一〇
第五章 師……一三
第六章 交友……一六
第七章 共同の生活……一九
第八章 克己と節制……二二
第九章 健康……二五

第十章　孝……二八
第十一章　長幼……三〇
第十二章　習慣……三三
第十三章　質素儉約……三六
第十四章　獨立心……四〇
第十五章　秩序……四三
第十六章　公德……四六
第十七章　競爭……四九
第十八章　努力……五三
第十九章　禮儀……五五
第二十章　教育勅語……六八

目次終

中學教科

現代修身訓　卷一

清原貞雄著

第一章　立志

古人も、志が立つと云ふ事は既に其目的の半ばを達したも同樣であると云つて居るやうに、何事をなすにも先づ志を立つる事が肝要であり、又第一歩である。すべて人間の行動は其心の働きが形に現はれたものに外ならないのであるから、先づ其心が働き出さなければ何時まで經つても行動は始まらない、從つて何事も出來ない。

立志の意義

最早小供では無い

其心の働きは種々様々であるが、或る目的を定めて其目的に向つて進まうと思ひ立つ心の働きが卽ち立志である。人間が他の動物と違つて萬物の靈長と云はれるのは、他の動物の如く漫然と本能の動くがまゝに委せず、一定の目的を立て、其目的に向つて進むからである、卽ち志を立つるからである。

然し目的と云つても高尙な目的もあれば卑しい目的もある。換言すれば價値のある目的もあればそうで無いものもある。それに應じて達成する所にも差が生ずるわけである。

小學校に學んで居る間は尙他から導かるゝまゝに、只懸命に勉强して居ればよい、然し旣に小學校を終る頃になれ

立志の時期

目的が定られば興味が無い

は最早小供では無い。故に各々目的を定めて將來の見込を着けなければならぬ。卽ち志を立てなければならぬ。而して中學校に入學した初め、心持の最も新しくなつて居る時は、立志に最も適當な時期である。此時に當つて、最も高尙に、最も價値ありと信ずる所の目的を撰んで、其目的に向つて勇往邁進する固き決心をしなければならぬ。此時の決心は卽ち其人一生涯の運命を決するのである。

斯く志が立ち目的が定まつてこそ、之から後の五箇年間の學業も極めて樂しく受け、愉快に勉强する事が出來るのである。もし確乎たる目的が立つて居ない時は、授業に何等の面白味もなく、勉强に張合が無くなつて、終には中途學業を廢するやうな不幸に陷る事を免れないのである。

目的を明かにせよ

學問の目的は人間を完成するにある

第二章　學問の目的

既に志を立てゝ學問の途に上る、第一に學問と云ふものの目的を明確に知つて居なければならぬ。然らずして只一般の風に從つて漫然と學に就くが如きは所謂附和雷同であつて決して其志を遂ぐる所以で無い。

學問の目的は一言に盡せば完全なる人間を作り上ぐるにある。往々にして學問の目的は知識を獲るにありと考ふるものがある。固より知識を弘むる事は學問の目的中の最も重要なるものゝ一つであるが、然し如何に知識を廣く修得しても、只それのみを以て完全なる人間と云ふ事は出來ない、同時に德性を養ふ事を必要とする。智德兼ね備

人間の生活と動物の生活

社會の人に後れてはならぬ

はつて始めて完全なる人間と云ふを得べく、完全なる人間が出來上つて始めてこゝに學問の目的を達したと云ふ事が出來るのである。

吾等人類は、始めは自然のまゝに動物と同じやうな生活をして居たものが漸次發達して、種々の技術、種々の知識、種種の德性を有するに至り、遂に他の動物とは全く違つた高等社會生活を營むやうになつたのである。今日の人類の生活は高等であると同時に甚だ複雜である。

此高等にして複雜なる人類社會の間にあつて立派に生活して行くには、自分も其社會に後れないやうにして行かなければならぬ、卽ち今日の社會の人々が有して居るだけの技術と知識と德性とを備へなければ此進んだ社會に立

學問は其唯一の方法

學問の眞の目的

つて行く事が出來ないのである。

此技術と知識と德性とを十分に發達せしむる爲めには學問をするより外には方法は無い、學問をして以て之等を發達せしめ、始めて此進んだ社會に處して行く事が出來るので、斯くして此進んだ社會に立派に處して行く事の出來るものが完全な人間である。之が學問の眞の目的である、而して少年時代は此學問の基礎を作る最も大切な且つ最も適當な時代である。此期を逸しては再び之を取り返す事は出來ない事を忘れてはならぬ。

敎育勅語に「學を修め業を習ひ以て智能を啓發し德器を成就し」と仰せられたのは卽ち此學問の眞の目的を御示しになつたのである。

熱心と誠意

方法の工夫

第三章　勉强の方法

學問の目的が明かになつたならば、其目的を達する爲めには大に勉强しなければならぬ。如何なる事がらでも、一つの目的を達するにはそれ相當の努力を要する、まして完全なる人格を作ると云ふやうな高尙な目的を有する學問は非常の熱心と誠意とがあつてこそ始めて之をなし遂ぐる事が出來るのである。

然し其方法宜しきを得ざる時は、如何に熱心と誠意とがあつても大半徒勞に歸して完全に其目的を達する事は出來ない、故に勉强の方法を如何にするかと云ふ事が極めて大切な問題である。

自習と授業

學問の進歩は、他から導かるゝと云ふ事と自ら進むと云ふ事との二つの力を併する事に依つてよく之を實現する事が出來る、換言すれば自習と授業と相待つて始めて成績が擧るのである。自ら思考するの勞を厭うて何事も師に賴ると云ふやうな事では到底眞の理解と進歩とを望む事は出來ない、他日役に立つやうな實力は養へない。

豫習の要

故に授業を受くる前の豫習が大切である、豫習を怠つて敎場に臨むが如きは策戰計畫を樹てずして戰爭を始むると同じである。然し如何に豫習に努めても、到底自分の力では解する事の出來ぬ問題に出會ふ事がある、又解し得たと信じて居つても誤つて居る場合がある。此に於て豫習の結果を確め、其解し得ざる問題を解決し、誤つて居る點を

學校の要

復習の要

正し、更に考へ及ばざる所を補ひ、知らざる事柄を敎へらるるのが學校である、而して尙不審の點があらば憚る所なく、恥づる事なく、勇敢に、十分理解の出來るまで質問しなければならぬ。斯くてこそ其授業に無限の興味があり、從つて學業が速かに進歩し、修むる所を完全に理解するのである。

然し折角敎場に於て得た知識も、之を其まゝ放棄する時は忽ちに忘失して、學ばざると同一の結果となる。故に一旦理解し得た所は更に之を復習しなければならぬ、復習は獲得したものを完全に我ものとする爲めである。斯く、學んだ所を着々として我ものとして行く生徒の學業の進歩は期して待つ事が出來る。

自然我と廣我

我が學校は廣我である

第四章　愛校心

此世に生を營んで居るものは何れも己れを愛する事を知つて居る。然るに人間以外の他の動物は只自然我を愛する事のみを知つて廣我を愛する事を知らない。自然我とは、自分一個の身體丈けを指し、廣我とは自分の屬して居る或る團體を指すのである、卽ち自分の家族、自分の屬する國家等は、他の家族、他の國家に對する時に一種の「我れ」卽ち廣我である。人間のみが此廣我を愛する事を知つて居るのである。

自分の學んで居る學校も自分に取つては一種の廣我である。一旦學校に入學して其生徒となつた以上は、其學校

生徒は學校を作る要素

愛校の意義

愛校の二通りの方法

全體が廣我で、自分は其代表者であると云ふ事を自覺しなければならぬ。「我」であれば之を愛し之を保護するのは當然であり、又義務である。然るに、往往にして學校は只一時學業を受くる爲めの場所に過ぎないものであつて、自分自身とは全然別のものであると考ふるものがあるが之は大なる誤りである。學校とは、校舍と教師と生徒との合體したもので、生徒各自は學校を構成する要素である。

學校を愛するは自らを愛する所以であり、學校を尊重するは自らを尊重する所以である。

學校を愛するに二通りの方法がある。一つは有形的のものであつて、校舍を保護し、校具を大切にする事である。他の一つは精神的のものであつて、よく校則を守つて校風

愛校心は愛國心の基礎

を高め、學業を勵んで成績をよくし、それに依つて校名を擧げ校運を盛にする事である。

學校にあるは僅に數年の間であるが其間は精神修養に努め、立派な人格を作り上ぐるに最も大切な時期である。此大切な時期に於て眞心を以て學校を愛する者は將來社會に立つては社會を愛し、國民としては國を愛する事の出來る人であつて、愛校の精神はやがて擴張して貴い愛國心となる。國家の爲め有爲の人物は學校にあつては斯樣に愛校心の強いものゝ中から出るのである。もし學校は一時的の場所であるからと云つて之を愛護する精神の無いものは、社會に立つては責任を知らず、國民としては國を愛する事を知らず、遂に國家有用の材となる事の出來ない人

師の任務

師は生徒の心の親

である。

第五章　師

學問の進歩には自ら勉めて研究する事が最も大切であるが、學科の種類甚だ多く、日に日に新しく課せらるゝ問題を悉く正しく自得して行くと云ふ事は何人にも出來るものでは無い、又自ら解し得たと信じて居る事が果して正しいか否かを自ら判斷する事は出來ない。此に於て其研究の方針を與へ、難問題を解き示し、誤れるを正し、又生徒に取つては未知の新知識を授くるのが師である。

生徒が師に負ふ所は單に斯樣な知識の問題に止まるものでは無い、師は全人格を以て生徒を導くのである。生徒

師も人である

は師に依て知識を授けられ蒙を啓かるゝと同時に道德的感化をも受くるのである、云はゞ師は生徒に全精神を賦與する所の心の親である。師と生徒との關係が如何に深いものであるかは之を以て知るべきである。

然し乍ら敎師も人間である以上、或る種の缺點を有する事あるは到底免れない、又誤りを傳ふる事が無いとも限らない。もし生徒の中に、師の有つて居る缺點又は誤りを發見した場合に、それに依つて師を輕んずるが如き者があるならば、それは大なる心得違である。師は其短所を以て生徒を導くものでは無く、各々長ずる所を以て導くのであるから、生徒も亦師の最も長ずる所を汲めばよい。然るにことさらに其缺點を見て之を批判し、其長を學ぶ事を努めざ

愛する故の叱責

るが如きは、生徒自らの本務を忘れ、己れの卑劣なる心を暴露するものであつて、斯の如き生徒には到底其正しき進步と成業とを望む事は出來ない。

師が生徒の怠惰、又は不正を叱責するは好んで之をなすものではない。他を責むる時は必ず己れも苦しむものである。其苦しみを忍んで尙ほ且つ責むるは只衷心其生徒の將來を思ふからである。もし嚴格なる敎師を厭ひ叱責せられたるを怨むが如き生徒があつたならば、それは己れに不忠實であり、反省する事を知らざるものであつて、斯くの如き者も亦成功を期し難い。

師を敬し、師の敎を守り、師の長ずる所に則り、師が嚴格であれば却て之を喜ぶ事の出來る生徒は、卽ち、自己を尊重し、

己を伸ばし、自ら反省する事の出來るものであつて、斯の如きは必ず知識道德共に正しく發達し、將來國家社會に有用なる人材となり得る生徒である。

交友の目的

第六章　交　友

人間は天性友を欲するもので、孤獨の生活は到底寂寞に堪へないのが普通である。心の合うた友と交るといふ事は何ものにも替へ難い樂しみである、殊に少年時代に在ては朋友との交りは其樂しみの最も深いものである。然し乍ら吾人は交友を以て單に樂しむ爲めのものと考へてはならない、樂しみを求むると同時に互に益する所があつて始めて交友の目的を達したと云へるのである。

朋友の感化

自ら其友である

友と交つて益を受くる爲めには必ず良友を撰ばなければならぬ。朋友から受くる感化は善惡共に甚だ大きいものであつて、過つて惡友と交る時は忽ち自分も惡化せられて終う。古人も「朱に交れば赤くなる」と云ひ、諺にも「其人を知らんと欲すれば其友を見よ」と云つて居る程である。故に努めて良友と交り、惡友は必ず之を避けなければならぬ。

良友を得る爲めには自分も常に善良である樣に努むる事が必要である。俗に「類を以て集まる」と云つて居るやうに、善良なる生活の周圍には自づから善良の友が集まり、不良なるものゝ所には必ず惡友が集まるものである。故に自ら善良で無ければ決して良友を得る事は出來ない。自ら善良の生徒となる事に努むれば求めずして良友が出來

一生涯の友

る、良友が出來れば自然に其善い感化を受け、自らも亦善い感化を其友に與へ、斯くして互に切磋琢磨する事は實に人生の一大快事である。

眞の良友

一旦良友を得たならば、終生之を失はない樣にしなければならぬ。良友は學生時代に互に切磋琢磨するのみならず、社會に出でゝ後までも互に相助くるものである。喜びあれば之を分ち、困難あれば互に勵まし、不幸あれば互に慰め、過ちあれば互に諫むるのは眞の心友であつて、世に心友程頼もしいものは無いのである。

友を失はぬ方法

其心友を失はない爲めには終始信を以て交はらなければならぬ。如何に交際法が巧みであつても、信の一事を缺く時は決して其交遊を完うする事は出來ない、互に信を以て相許した友は、永い交際

學校は共同生活

の間に如何なる行き違ひがあつても、相信じて居るから決して疑はない、之を中傷するものがあつても之を破る事は出來ない、斯くの如きが眞の友である、教育勅語に「朋友相信じ」と宣はせられたのは正に此事であらうと拜察する。

第七章　共同の生活

共同生活者の心得

吾等人間の生活はすべて共同生活である。然し其廣い共同生活の事は暫く擱いて、今此所では生徒としての生活を考へて見なければならぬ。共同生活の最も著しいものは軍隊と學校とである。

學校に於てはすべてが共同である、授業を受くるにも遊戯や運動を行ふにも共同で無いものは一として無い。斯

共同生活に對する自覺

く共同の生活を營んで行く學校に於て、生徒として常に忘れてはならぬ事は、自身の一擧一動がすべての他の生徒に關係を有つて居ると云ふ事である。もし生徒の中一人でも共同の生活と云ふ事を忘れて勝手な行動をなし又は義務を怠るものがあれば其學校全體の調和が破れる。學校全體の調和が破るゝ時は其學校の學業其他すべての成績を十分に擧ぐる事は到底出來ない。

學校全體が共同生活を營んで居ると云ふ事を生徒各自が覺悟をして常に他と歩調を合せて行く事に依つて始めて學校全體の調和が保たれ、學校全體の調和が保たれて始めて學校としての成績が擧がり、學校教育の目的を達する事が出來る。それはやがて生徒各自の利益となるのであ

眞の自由は調和に依つて得らるゝ

る。

生徒各自が學校全體に歩調を合せて行くと云ふ事は、時として生徒に窮屈を感ぜしむる事があるかも知れない。然し之を窮屈なりとし、不自由なりとして厭ふものがあるならば、それは眞の自由を解する事の出來ないものである。眞の自由、正しき自由は、全體の調和があつて始めて得らるる。調和が失はれて混亂に陷つた所に決して自由は得られない。恰も各自左側通行の約束を守る事に依つて始めて繁華なる街路を自由に通行し得る樣なものである。

共同生活の自覺は人間として如何なる場合にも必要であるが特に生徒として學校生活を營んで行く上に於ては最も大切である。其精神を十分に有つて居るものはやが

て社會に出てからも最もよき社會生活を營み得る人である。

第八章　克己と節制

克己節制の意義

克己とは自分の私慾に打ち勝つ事であり、節制とは適當の度合を守る事であつて、此二つは全く切り離して考ふる事の出來ないものである。安逸を好み快樂を望むは多くの人に免れ難い天性である。然し好むまゝに安逸に耽り、望むまゝに快樂を追ふと云ふ事は自ら人間としての尊い所を捨つるものであると云はなければならぬ。

怠惰心

僅かな小さい仕事を一つ仕遂ぐるにも夫れ相應の努力を要する、まして學を修め德を練り、やがて世の中に出て立

派な生活を營み、進んでは人の爲め、社會の爲め、國の爲めに有用な人物になる爲めには非常の努力を要する事は云ふまでも無い。然るに常に此努力を妨げようとするものは我等人間の有つて居る怠惰性卽ち安逸を好む心である。

中庸

吾々は何事をなすにも度合と云ふ事を考へて之を守らなければならぬ。古人は之を中庸と名づけ、正しき道理は常に中庸に存する事を說いて居る。中庸は何事に對しても大切であるが、特に吾等一個人の生活に於ては常に之を守る事が必要である。例へば好む事には耽り易く、好む食物は過ごし易いものであるが、何れも度合を考へて中庸を守らなければ、或は大切な學業が疎かになり、或は健康を害ふに至る。然るに稍もすれば吾人をして中庸を失つて身

克己の用

を誤らしむるものは快樂を望む本能である。

吾人の心の中には努力を妨げようとする怠惰心と、身を誤らしめ易い快樂欲求の心とが潜んで居る。此二つの心に打ち勝つて行くのが克己である。

天才と克己

昔から偉大な事業をなし遂げて居る人を天才と稱して居るが、それらの人々の傳記を研究して見ると必ず克己に依つて努力を續け、節制を守つた人々である。天才とは實は努力の別名に外ならぬ。

克己の困難

然し乍ら己れに克つといふ事は最も困難な事である。何人にも打ち勝つ程の力を有つて居る偉人であつても己れに克つ事が出來ない爲めに遂に失敗した人は少くない。之に反して己れに克つ事の出來る人は如何なる場合にも

決して失敗する事は無い。此最も困難なる克己に成功する事が出來れば何事にも成功するのである。

第九章 健康

健全なる身體と健全なる精神

何程立派な目的を立て、其目的に向つて勇往邁進しようとしても、もし健康が不十分でそれに堪ふる事が出來なければ決して其目的を達する事は出來ない。諺にも「健全なる精神は健全なる身體に宿る」と云つて居るやうに、何事をなすにも第一に大切な事は身體の健全である。身體が健全で無い爲めに、前途有望な幾多の青年が中途に斃れて半生の努力を水泡に歸せしむる如きは、其當人の爲めには此上もない不幸であり、國家の爲めにも誠に悲しむべき事で

健康を圖るは人の義務

ある。故に將來大に爲す所あらんと欲するものは必ず大に健康に意を用ゐなければならぬ。健康に意を用ゐる事は、己れに對し、己れの目的に對し、更に國家に對する義務である。

健康增進の方法

健康を增進する爲めには、身體を鍛錬する事と衛生を重んずる事との二つの方面からしなければならぬ。

身體の鍛錬には運動を盛にして筋骨を發達せしむる事と、寒暑に馴らして抵抗力を養ふ事との二つがある。如何なる運動を行ひ、如何なる方法に依つて抵抗力を養ふかに就ては、其人の趣味に依り、體力に應じて夫々適當に撰ぶべきであつて一概に云ふ事は出來ない。

衛生を重んずるには、身體の清潔を保ち、放縱に流るゝ事

健康と長壽

を避けて規律正しき生活を營み、飲食を適宜にして暴飲暴食を慎み、特に傳染病に對しては細心の注意を拂はなければならぬ。

斯くの如く積極消極兩方面から健康の增進に努むる時は、天性壯健なる人は勿論、生れつき强健ならざる人であつても、相當の健康と長壽とを保ち、それに依つて偉大なる事業を遂ぐる事が出來るものである。我國の貝原益軒、英國のスペンサー等は何れも天性虛弱であつたが、努めて健康に注意して勉强した結果有名な學者となつて世に有益なる幾多の著述を殘した人々であつて、昔から斯樣な例は少くないのである。健康は幸福の母なりと云ふ古人の言は決して吾人を詐かないと云はなければならぬ。

親の愛は最も純眞である

親の辛勞

第十章　孝

世の中に於て最も純眞の愛を求むるならばそれは父母の其子に對する愛である。父母の其子を愛するは何等爲めにする所がある譯でもなく、一意專心只其子の爲めを思ふばかりである。其父母が其子を養育する爲めにどれ丈けの辛勞があるかといふ事は、既に中學校に入學した程のものには十分に會得せらるべき筈である。

其子が生れるや否や、寒さにつけ暑さにつけ、父母の心盡しは到底言葉や筆を以て現はし盡せるものではない。もし其家が富有であらば、其子を養育するに物質上の苦勞は無いであらうが、其子の行末に就ての心遣ひは一通りの事

孝道の實踐

孝は道德の第一歩

ではない。それら親の至純なる愛や其子に對する心盡しは自分が親になつた後で無ければ之を十分に理解する事は或は困難であらう、然し其一端を解し得た所でも父母の恩の高く且つ深い事は疑ふ事は出來ない。

此父母から受けた鴻恩に報ゆるのが孝道である。孝道は父母の鴻恩に對する子の義務であり、此義務を果たすのは子として親に對する眞心である。此眞心あるは人間が萬物の靈長たる所以であつて、此を缺くに於ては禽獸と何等撰ぶ所が無いと云はなければならぬ。

又孝を完うするは人間の道德生活の第一歩である。詳しく云へば、人が生れて最初に交渉を有つものは父母であつて、其父母に對しての義務卽ち孝を盡す事は、やがて社會

孝を完うする方法

に立つて道德的行爲を始むる第一階梯である、此第一歩に堪へ得ないやうな人は社會人としての落伍者である。古人が孝は百行の基であると云つたのは蓋し此事である。

然らば其孝を如何にして完うすべきか、普通の場合に於ては、未だ少年時代にあるものが其父母を養ふと云ふやうな事は必ずしも必要では無い。只父母を敬し、父母の命を守り、善良なる少年として父母を喜ばしめ、父母の心遣ひを少しでも輕くすればよい。人間生活に取つて大切な家庭と云ふものゝ價値を十分に發揮すると否とは其子が孝道を守ると否とに關係する所最も多いのである。

第十一章　長幼

家族生活と兄弟の道

兄弟喧嘩

家族生活を完全ならしむるに其子が親に對して孝道を守る事は第一に大切であるが、固よりそれのみでは足らない、もし兄弟がある場合には其兄弟の關係を完全に保つて行かなければならぬ。兄弟の關係を完全に保つとは、長幼の序と相互の友愛とを完うする事である。

兄弟姉妹は古人も之を五指に譬へて居るやうに、同じ兩親から分れて切り離す事の出來ない密接な關係を有つて居るものである、從つて兄弟姉妹の間の自然の愛は親子の間に次で深いものである、然るに兄弟姉妹は一家の中に居つて朝夕相接して居る結果、自然些細の事から相衝突するやうな機會も多い譯で、仲のよい兄弟でも稍もすれば所謂兄弟喧嘩が起る事がある。

長幼の序を立つる要

長幼の序の眞の意義

此に於て長幼の序を立つる事が必要である、長を長として之を敬ひ、幼を幼として之を勞はり導くのである。兄弟喧嘩は幼者が年長者を敬はずして之を凌がんとし、年長者が幼を幼とせずして自分と同等に見做す所から來る。幼は長を敬うて其指導に從ひ、長は幼を幼として之を勞り、之を指導する心持を失はなければ兄弟喧嘩は起り得ないのである。

然し此長幼の序を只階級的に考へて、命令服從の關係を以て進む時は、衝突は起らないかも知らぬが、それでは冷やかな、只形式的なものになつて終つて、家族生活の本領を發揮する事は出來ない、其關係は何所までも友愛を以て結ばれたものでなければならぬ。

兄弟の友愛と親の心

天性と習慣

友愛を以て結ばれた兄弟姉妹は、其幼者に對する長者の指導も、長者に對する幼者の敬も、冷やかな形式に流れず、最も溫かい純情を以てする事が出來るので、斯くてこそ其家は樂しく又榮えて行く事が出來る。之に反して其兄弟姉妹が長幼の序を失つて相爭ひ、或は冷やかな關係で形式的な平和が保たれると云ふ事であると、其兄弟姉妹を一樣に愛する父母の不滿足は如何であらう、之を思へば兄弟姉妹の麗しい和樂は、やがて孝道にも協ふ所以である事がわかるのである。

第十二章　習慣

人の天性は必ずしも萬人一樣では無いが然し普通に考

習慣は第二の天性

へらるゝ程甚しき差のあるものでは無い。然るに實際に世間の人を見ると其性質には非常に大きな相違があるのはどう云ふ譯であるかと云ふに、之は全く其習慣に差があるのである。

諺にも習慣は第二の天性であると云つて居る樣に、生れた時には大抵同じ樣な性質を有つて居つても、永い間よい習慣に從つて居る人はよい性質を有つて生れたと同じ結果になり、之に反じて惡い習慣に從つて居れば初めから惡い性質を有つて生れたと同じ結果になるわけである。よい習慣が如何に吾人に取つて大切なるものであるかゞ之によつてわかる。

然らば如何にしてよい習慣がつき又惡い習慣がつくの

よい習慣は努力次第

であるか、之はつまり其人の努力如何によるのである。抑も習慣とは同一の事を屢々繰り返して居る間に何時しか其事が獨りでに、殆ど何等の意志を用ゐずして行はるゝ樣になつたものである。故にもし惡い事を繰り返して居れば惡い習慣がつき、よい事を繰り返して居ればよい習慣がつく。一旦習慣がつけば之を改むるには非常の努力を要するものである。其習慣がつき始むるのは主として少年の時代であるから其時に最も注意をしなければならぬ。

最初よい習慣がつき始むればよい事を繰り返すから益々よい習慣が完成し、惡い習慣がつき始むれば惡い事を繰り返すから惡い習慣が完成する。而して人間は少しく心を緩むる時は忽ち惡い方に傾き易いものであるから常に

悪い習慣は改めよ

心を引き締めて悪い習慣のつく事を防ぎ、よい習慣を作る事に努力しなければならぬ。

一旦出來上つた習慣も、それが悪いと氣がついたならば假令如何に困難であらうともそれに打ち勝つて之を改めなければならぬ。之を改むるは早い程容易である。もし悪い習慣を打ち捨てゝ置けば益々悪くなる一方であつて、斯樣な人は決して立派な人間になる事も又立派な事業を成し遂ぐる事も出來ないのである。

質素儉約の意義

第十三章　質素儉約

質素儉約とは實用を缺かない程度に於て粗衣粗食に安んじ、簡素なる用器に滿足して努めて無用の浪費を略く事

奢侈と堕落

質素儉約を守るものは心にゆとりがある

富者と儉約

である。之れ實に人間に缺く可らざる道德の一つである。多くの罪悪は身分不相應の欲望と、それに伴ふ奢侈とから起る。奢侈に耽る結果は金錢に窮し、金錢に窮した結果は遂に金錢を得んが爲めには手段を擇ばざるに至るからである。

之に反して平常質素儉約を守るものは自然其經濟に餘裕を生ずる、從つて貪る心が起らぬ。又たとへ餘裕なき場合に於ても質素の生活に馴れて居れば貪る事を要しない、斯の如き人は常に心を高尚に保つ事が出來る。剛健なる氣風も又之に伴ふものである。

然らば富有なるものであれば、何程贅澤な生活をしても差支ないかと云ふに決してそうでは無い。富者が有るに

人間と不運

儉約に對する生徒の心得

任せて浪費する時はそれだけ其國の寶を減ずる事になる。富者が擧つて浪費を顧みないやうになれば其國は衰亡に赴く事を免れない。又世の中には富者のみでは無く、生活に必用なる物品すら十分に得る事の出來ない貧者も少くない。斯樣な人々に對しても自ら制して質素な生活に努むる事は富者の義務である。

又人間には不運と云ふ事がある。今日富有なるものも思はぬ運り合せに依つて俄に貧窮に陷らぬとも限らぬ。もし不幸にして斯樣の事に遭遇した時にも平常質素儉約に馴れて居るものは、奢侈に馴れて居るものよりも其苦しむ事も少い道理である。

以上は一般の人に就て質素儉約の大切なる事を述べた

質素儉約は一の道德行爲

のであるが、父兄から學資を受けて居る生徒に就ても同じ事である。否、自分の働きに依つて得た金錢で無く、父母の辛勞に依つて得た金錢であれば猶さら一錢の浪費をも愼むの義務がある。又たとへ富者の子弟であつても、奢侈に耽つて贅澤な學用品を用ゐるが如きは自ら浮華の風に流るゝのみならず、他の生徒にも惡感化を及ぼす事を考へて十分に自制する事が大切である。要するに質素儉約を守ると云ふ事が一つの道德であつて、金錢の有無に關係するのでは無い。もし單なる金錢の問題であると考ふる時は富者の贅澤となり、又反對に過つて吝嗇に陷る、儉約と吝嗇とは明かに區別しなければならぬ。

獨立心の要

天は自ら助くる者を助く

第十四章　獨立心

獨立心とは自分でなすべき事は、人を賴りにせず必ず自ら之をなす覺悟を持つ心である。此獨立心は何人にも必用である。人を賴りにする心があつては何事にも決して成功するものでは無い。昔から偉大なる事業を成し遂げた人々を見ると孰れも獨立心の強くなかつたものは無い。西洋には「天は自ら助くるものを助く」と云ふ格言がある。何人にも賴らず、自分の力を以て成し遂ぐると云ふ覺悟を有つ時に始めて其人の眞の實力が出て來る。有つて居るだけの全力を働かす時に、それまで困難と思はれた事も、案外安々と出來る。其時恰も天が自分を助けて呉れた樣に

獨立と孤立

感ずるのである。

然し乍ら、獨立と孤立とを混同してはならぬ。何人と雖も孤立して行けるものでは無い。直接間接相互に助け合つて行かなければ吾等は一日も生活して行けない。況や生徒の身分としては父兄の補助を受け其恩惠に賴る事なくしては學問を續けて行く事が出來ないのである。それらの補助を受けてならないと云ふのでは無い。只他の助けを仰がなければならぬ事と、自分のなすべき事とを明かに區別して、自分の當然なすべき事に就ては、如何に面倒な事であらうとも必ず自ら之をなして、決して人を賴りにしてはならぬ。學科などに就ても、少しく困難な問題に遇ふと直ちに師や先輩に解決を賴むと云ふやうな事では到底

身の廻りの事は自分でせよ

進歩發達は望まれない。自分の力のある限りを盡して解決を試みた上で、どうしても不能と思うた時に始めて師や先輩に質す事にしなければならぬ。

日常身の廻りの事に就ても、自分でなし得る事は必ず人手を借らない習慣を附くる事が大切である。幼少の時から斯樣にして行く時は、成長して世の中に出てからも強い獨立心があるから何事に志しても必ず成功する。富有なる家の子弟から割合に偉人が出ないのは、幼少の時から多くの召使などに侍かれて居つて、自分の事も人に任せ、其結果知らず知らずの間に倚賴心が生じ、獨立心が乏しいからである。何人も深く注意すべき事である。國民各自が強い獨立心を有つて居る時は其國も亦強いのである。

秩序と仕事の効果

第十五章　秩序

何事をなすにも秩序正しくすると云ふ事が大切である。もし物事に秩序が無ければ折角の努力もそれだけの功果を擧ぐる事が出來ない。同じ事をなすにも秩序正しくすると否とは、其難易、其遲速に甚だ大なる差があるものである。同じく勉强するにも、學科の性質、學科の難易、分量等に依つて豫め其順序、時間の振り充て等を十分に考へて一定の表を作り、それに依つて着々として之を片づけて行くのと、始めから何等の秩序もなく、計畫もなく、只手當り次第に彼是と勉强するのとは、其效果に於て雲泥の相違を生ずる事は疑ふ事は出來ない。

本居宣長の大著述を遂げた理由

日常生活と秩序

本居宣長は其澤山の藏書を秩序正しく整頓してあつて、假令暗中にても自由に所要の書を取り出す事が出來たと云ふ。宣長が醫師と云ふ忙しい職業に從事する傍ら古事記傳の如き驚くべき大著述を完成する事が出來たのは、其藏書をよく整頓して居つたのみならず、何事をも秩序正しくして居つた事が大きな關係を有して居るのである。

日常生活に於ても萬事秩序を立てゝ置く時は、物事がなだらかに運ぶ、從つて其生活が愉快である。火急の場合にも狼狽する事なく、從つて失敗を招く事が少い。登校の際、其日必用な學用品を忘るゝが如きは秩序が立つて居ないからである。假令忘れないまでも、其書齋や机の引出の中が亂雜である爲めに、毎日無駄に費す時間は永い間に積つ

秩序なき人の損失

性癖と習慣

て容易ならざる損失である。

秩序正しからざる人は、時間の浪費や、失敗を重ぬる事に依つて自ら大なる損失を招くのみではない、平常秩序正しくして居る人と、然らざる人とは、他人の其人に對する信用に大なる關係がある。秩序正しき生活を營んで居ない爲めに其人の人格まで疑はれ、世人の信用を得る事が出來ないと云ふ事になると、其見えない損失は實に莫大であると云はなければならぬ。

物事を一々整頓すると云ふ事は面倒な仕事の樣であるが、一旦其習慣を附くれば何等困難なものでもなく、殆ど知らず知らずの間に整うて行き、もし整へずに放置する時は却て不快と苦痛とを感ずるものである。

世の爲めに盡す方法

學生の社會に對する義務

第十六章　公德

吾人が社會の一員として立派に其責任を盡して行くには種々の方法がある、而して大なる力を有つて居る人は大に社會の爲めに盡す事が出來るのである。教育勅語にある如く、公益を廣め世務を開くと云ふ如きは、其力ある人に對して期待すべき事である。然し乍ら人々は生れつきの力量や其境遇などに依つて、何人も同じ樣に社會の爲めに盡し得るものでは無い。まして未だ學生の身分にあるものは、既に社會に出て居る人々の如く、積極的に十分の力を社會の爲めに盡す事は出來ない。

只、學生であつても、亦比較的無力の人であつても實行す

公德の定義

我國には公德が不十分

る事の出來る所の社會道德、或は社會に對する義務がある、それは公德を守ると云ふ事である。公德とは社會に迷惑を懸けない事である。直接又は間接に社會に損害を與ふる事を避くる事である。公園の樹木を害ひ、共同の器具を破り、公共の場所又は乘物を汚し、交通の妨害をなす等は何れも公德を破る行爲である。尙其外數ふれば無數にあるであらう。之等は一片の公德心さへあらば容易に避くる事が出來る。何程の富、何程の力をも要しないのである、而も社會道德としては最も大切なものであり、其效果の極めて大きいものである。

此公德心と云ふ事は、西洋に於ては早くから唱へられて居り、從つて甚だよく發達して居ると云はれて居る。然る

公德なきは國の恥

に我國に於ては色々社會上の事情から、從來公德と云ふ事があまり顧みられなかつた結果、此道德が十分に發達して居ない。其ため社會が受けて居る損害は決して少く無いのである。

我國の社會の事情も昔とは大に違つて來た、從つて公德が十分に行はれなければ到底滿足な社會生活を營んで行く事が出來なくなつたのである。

殊に今日吾々が心を用ゐなければならぬ事は、外國との交際が益々親密になり、交通が益々頻繁になつた事である。公德心の有無は最もよく外部に表はるゝものである。從つて公德心の缺乏は第一に外國人の目にもつき、それに依つて國民の道德心の高さを評價せらるゝのであるから吾

競爭は進歩の母

競爭の必要

等は大に注意しなければならぬ。

第十七章　競　爭

競爭は進歩の母である。世の中が日に月に進んで行くのは多くの人々が、是迄の人の成し遂げた事よりも一層進んだものを作り出したい、又は發明したいと互に競ふ結果、次々に、從來無かつた立派な事が出來上るからである。それらを綜合して文明の進歩と云ふ。

世の中の有樣を見ると、小は一個人と一個人との間から、大は國と國との關係に至るまで競爭を免れないものである。太古野蠻蒙昧の時代から今日文明の時代まで進んで來たのも其競爭の結果であるとすれば競爭は決して惡い

事では無い。學校に於て級友の間に於ても亦競爭は必要である。互に他に劣らない樣に勉强すればこそ學問も益益進歩して行くのである。

然し乍ら競爭の眞の精神が何所にあるかといふ事は十分に明かにして居なければならぬ。競爭の目的は相手を負かすのでは無い。相手よりも勝れた實力を養ふ事である。人には夫々の天分があるから、如何に努力しても相手に勝るだけの實力を養ひ得ない事もある。只何人にも劣らない實力を養ひたいと云ふ事を少しの間も忘れず、常に力一杯を出して勉强すると云ふ其精神が貴いのである。此精神さへあれば其人の實力は斷えず增進し、斯の如き人は必ず成功する。一校の生徒が悉く此精神を有つて居れ

ば其學校は優秀なる學校となり、國民全體が此精神を有つて居れば其國は世界に雄飛するに至る。

斯くの如き競爭の眞の精神を理解して居れば、たとへ自分が負けても決して他を羨む心は起らぬ、自ら反省して益益努力するばかりである。然るに此眞の精神を知らず、競爭とは相手を負かす事であると誤解するに於ては容易ならざる弊害が起る。自分の努力の足らざるを反省せずして學友の優秀を妬み、相手の失敗を喜び、甚しきは卑怯なる手段を用ゐて相手を陷れんとする心さへ生ずるに至るのである。相手が自分より優秀であればある程、其人の爲めに祝し、又自分が之と競爭するに張り合ひある事を喜ぶ丈けの高潔なる心があつて始めて競爭の眞精神を理解した

運不運と才不才

運は偶然のものである

ものと云ふべきである。

第十八章　努　力

世の中には運不運といふ事がある事は免れない。生れつき豐かなる才能を以て居る人とそうで無い人とのある事も亦爭ふ可らざる事實である。從つて爲す事萬事順調に行つて、左まで苦心を積まずして目的を達する人、又左まで骨を折らずして普通の人のする事をなし遂げて行く人がある。之等は誠に惠まれた人と云はなければならぬ。只之等は普通の事業、比較的小さい目的の場合に限る事である。

運とは機會に遭遇する事である。機會は偶然のもので

天才のみでは恃むに足らぬ

努力の結果は必然であり無限である

あつて、必然のものでは無い。故に幸運にして成功する人は數に於て極めて少なく、例として極めて稀である。もし稀にある幸運者を見て自分も其人と同じ幸運を期待する事が出來ると思ふ者あらば其人は愚人である。何事にも成功せずして終る人である。

生れついた少しの天才を恃んでそれに依つて自分の志す所は容易に達する事が出來ると信じて居る人があるならば其人は遂に一生の中、何事をも成し遂げずして平凡に終る人である。生れつきの才は限りがあるからである。

運は期待する能はず天才は限りありて恃むに足らずとすれば吾々は何に賴るべきか、只正しき努力あるのみである。正しき努力の結果は偶然で無くて必然であり、又天才

運に依て得たものは失ふ

成功不成功は第二の問題

と違つて限りが無いからである。昔からあまり豐かな才能を以て生れず、非凡の努力に依つて偉大なる事業を遂げた人は無數にあるが、努力を伴はずして天才のみを以て大なる成功をなした人は一人も無い。

多く苦心を費さずして、幸運を以て小成功を遂げた人は、何時かは不幸に遭遇して必ず其得た所を失ふ。之に反して努力しても不運にして幾度か失敗する事があつても、其努力を棄てぬ人は何時かは必ず成功するものである。

極めて稀に、一生努力を續けても常に、事、志と違ひ失意に終る人がある。斯の如きは人力を以て如何ともす可らざる所である。然し乍ら、成功不成功は第二の問題である。ある限りの力を以て奮鬪努力し、倒れて後止む、之も亦男子

禮儀の意義と其用

たるもの、本懷ではあるまいか。

第十九章　禮儀

禮儀とは人に對する尊敬の心を外部に現はす事である。吾等が互に交際して行くのは單に身體が近く接するのみでは無く、互に其抱いて居る心を交換するのである。然るに心は目に見えない、故に何等かの方法に依つて自分の心を相手に示さなければならぬ、或は言葉を以てする事もあらう。或は顏色を以てする事もあらう。或は動作を以てする事もあらう。禮儀は之等種々の方法に依つて自分の相手に對する尊敬の心を表はすのである。人間が其交際を圓滑にして行くには必ず此禮儀を必要とする。

禮を失した結果

下に對する禮儀

少しの不注意から先方に對する禮を缺いたために其感情を害して遂に多年の心友を失ふ事がある。或は長者の信用を失ふ事もある。其所まで行かずとも禮を失したために朋友の間に爭を生じ、又は師弟の間に疎隔を來す事は少くない。

こゝに尊敬といふのは必ずしも自分より尊長者に對する場合をのみ指すのでは無い、尊長者に對する禮儀は最も注意しなければならぬ事は云ふまでも無いが、目下のものに對しても、相手の人格を認め、それ相當の禮儀を盡さなければならぬ。相手が如何なる階級の人であつてもそれに對して相當の禮儀を守る事に依つて始めて世の中は圓滑に、互に心持よく交際して行く事が出來るのである。

粗暴は不可

虛禮

禮の程度

東洋には昔から弊衣破帽、服裝を亂雜にし粗暴なる擧動をなす事を以て英雄豪傑の態度であるとする風があつたのであるが、之等は決して正しい事では無い。華美に流れない程度に於て身分相應の服裝を調へ、粗暴の擧動の如きは努めて之を避けなければならぬ。

然し乍ら禮儀は心を形に表はすものであるから、中に、先方に對する尊敬の心を存して居なければならぬ。中に尊敬の心なくして形にのみ表はすを虛禮と云ふ。虛禮は己れを詐き人を詐くもので、一種の罪惡である。

程度を守る事も大切である。尊長者に對しても度に過ぎたる禮を行へば阿諛となり、目下の人に對して度に過ぎたる禮を行へば却て愚弄と誤解せられる。阿諛は心ある

人の輕蔑を招き、愚弄は相手の怒を買ふ。共に意を用ゐなければならぬ。

教育勅語の由來

第二十章　教育勅語

教育勅語は古今東西に類稀なる英主であらせられた我明治大帝が國民教育の爲めに煥發せしめ給うたものである。

我國は既に千數百年前、支那の儒教、印度の佛教等が輸入せられ、それらの德教と我國固有の道德思想とが合して一種の國民的道德思想が發達し、それに依つて國民の道德生活を指導して來たのである。然るに、永く鎖國の有樣にあつた我國が明治維新の後開國進取の方針に改めてから、俄

國民道德の危期

に西洋の文明が輸入せられ、それらに壓倒せられて從來の古い文明は殆ど捨てられやうとする形勢に立ち至つた。其結果是迄國民の思想を導いて來た所の道德の教は忽ち其勢力を失つて終つた。之に代ふるに西洋の道德思想を以てする事が明治初年の多くの學者の考であつたのである。

然し乍ら國の事情が同じからざるため、又輸入して猶日淺きため、西洋の道德教も亦未だ國民の道德を指導する事が出來なかつた。從來の教は其指導の力を失ひ、新しく採用せんとする教も未だ其實績を擧ぐる力が無いと云ふ事になると、國民の道德生活は眞に危期に臨んで居ると云はなければならぬ。又從來の道德の教をすべて棄てゝ徒ら

國民道德の救濟

國民道德の完全なる經典

に、國情や歴史を異にした西洋の道德にのみ據らうとする態度も亦國家を危くするものである。

此國民思想の上に現はれた一大危期に際して、明治天皇は大に叡慮を痛め給ひ、國民を此危期から救ひ給はんとの思召を以て煥發せしめ給うたのが此教育勅語である。我國體と我國の歴史とに鑑み、從來の德教に基き、更に廣く世界の情勢を酌み、新時代の國民の遵守すべき德教として最も完全なる經典が此に出來上つたのである。實に古今に通じて謬らず、中外へ施して悖らざるものであつて數十年後の今日に於ても毫も其光彩を減じては居ない。我等國民は之に依つて其歸嚮する所を誤る事なく、國民がよく之を遵守する事に依つて我國は彌榮えて行く事が出來るのである。現在の吾々は勿論、苟も日本國民たるものは子子孫孫まで日夕之を拜誦して叡旨に添ひ奉らん事を努めなければならぬ。

中學教科

現代修身訓 卷一終

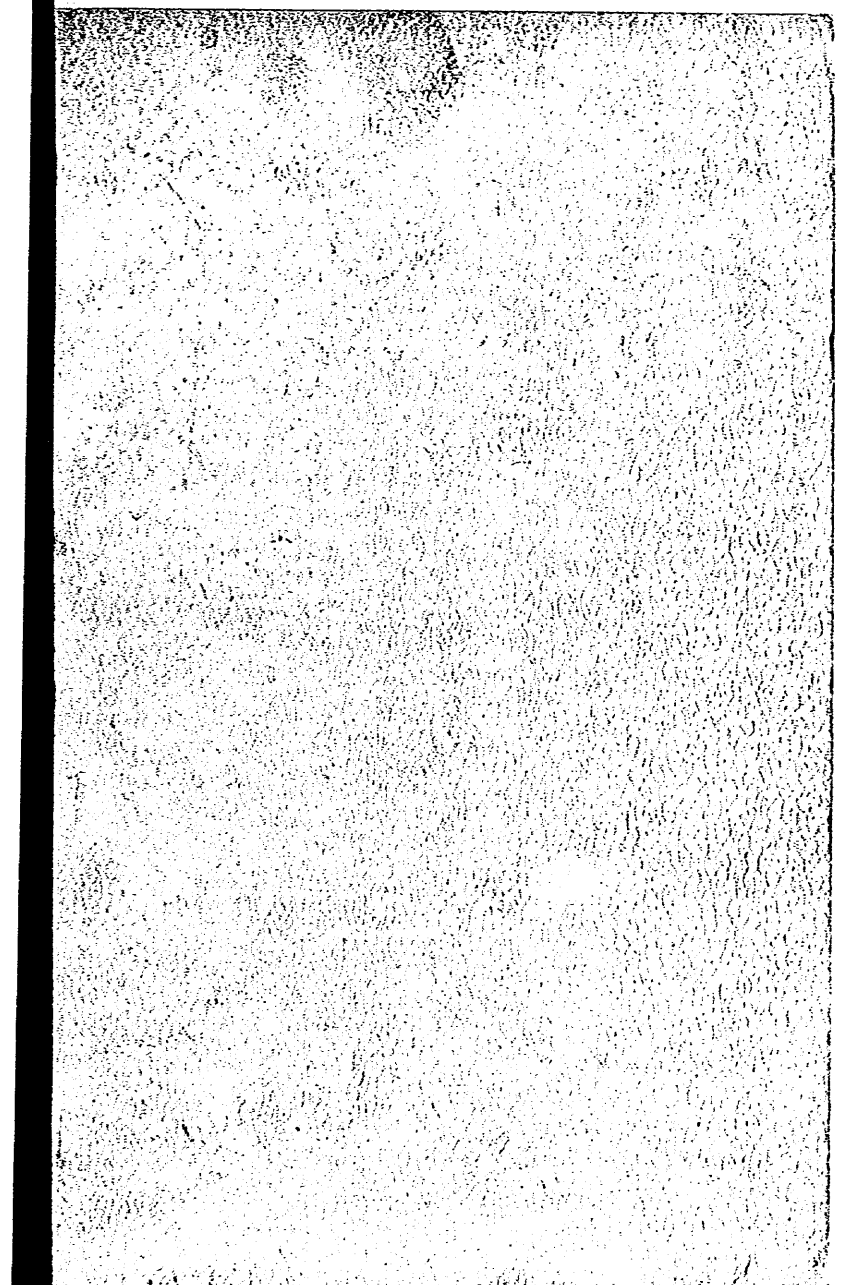
中學教科
現代修身訓

昭和三年七月十五日印刷
昭和三年八月二十日發行

著作者　清原貞雄
發行者　中村時之助　東京市牛込區甲良町三九番地
印刷者　新井修平　東京市京橋區木挽町二ノ一三
印刷所　電新堂　東京市京橋區木挽町二ノ一三

定價
卷一　金拾五錢
卷二　金拾七錢
卷三　金拾八錢
卷四　金式拾錢
卷五　金貳拾錢
昭和四年度臨時定價
卷一
卷二
卷三
卷四
卷五

發行所　東京市牛込區市ヶ谷甲良町三九番地　中文館書店　電話牛込三三二五番　振替東京三八四二七番

著作權所有

318
626